

存現文に“在”がつくとき

芳沢ひろ子

0. はじめに

存在・出現・消失を表す中国語の存現文は、場所または時間を表すフレーズ＋動詞＋目的語、という語順で表される。この時、冒頭のフレーズには一般には介詞はつかない。しかし時につくことがある。この冒頭のフレーズを場所フレーズに限った場合、普通は“在”という介詞はつかないが、つく場合もある。たとえば、「東京に大雪が降った」は“東京下了一场大雪”という時と“在东京下了一场大雪”と言う時がある。この中国語文において前者タイプと後者タイプはその使い分けのルールがはっきりと説明されないため、中国語教学の現場で日本人学習者はしばしば混乱する。日本語の「に」という場所を表す助詞に相当するものとして介詞“在”を意識する学習者は、存現文の冒頭に“在”を置くという過ちをしばしば犯し、そこで存現文の冒頭には普通“在”は来ないと学ぶのだが、実は教材の中で“在”がつく存現文はよく出てくるからである。

存現文の冒頭の場所フレーズには“在”はつくべきではないのか、どちらでもいいのか、もしどちらでもいいのであれば、日本人学習者が“在”をつけて書いた存現文を読む時の、中国人ネイティブスピーカーの違和感は何で起こるのか。

本文ではこの疑問について考え、存現文に“在”がつくとはどういう現象なのかを解き明かしていきたい。

1. 先行研究ではこの現象をどう捉えているか

栞山健介(1991)では、“在”そのものが場所を強調する機能を持ち、した

がって“在”のつく存現文の場所フレーズはその場所を強調する意味を持たねばならない、として“在”のつく存現文のさまざまな特徴を明らかにしている。

吕文华(1997)では、存現文の場所フレーズは“在”をつけないのが普通だが、あってもよく、語義や語用条件の支配を受けるとともに各人の語感によっても変わる、としている。また書面語の色彩が強いところではしばしば“在”がつく、としている。

齐沪杨(1998)では、存現文の場所フレーズに“在”がないのは、介詞フレーズと動詞の間に距離があるので格標識の強制力がはっきりせず、“在”の重要性が弱まってその結果省略される、として“在”のない存現文は“在”が省略された形であると考えている。

2. 用例の検討

先に述べた疑問を明らかにするためにまずは小説の用例からその特徴を探ってみることにする。

2. 1. “在”のつく存現文と“在”のつかない存現文の特徴

数冊の小説100万字から“在”のつく存現文全87例と、つかない存現文を同小説からアトランダムに100例集め、その特徴を観察した。“在”のつく存現文をX型、“在”のつかない存現文をY型とし、それぞれの場所フレーズの特徴を①～④の項目について、またその目的語の特徴を⑤～⑦の項目について調べた。①～⑦の項目の具体的な内容と用例及びその目的は以下のとおりである。

① “就(单)(只)”などの副詞が場所フレーズに前置されるもの

- (1) 我万没想到，就在我所熟悉的这些胡同街道里，还生活着这样的人物，～
(《胡》)

これらの副詞を用いることによって場所フレーズが強調されている時のX型Y型の割合はどうか。

② 場所フレーズが名詞+方位詞タイプ

- (2) 在窗外响着各种各样的声音 (《寒》)

(3) 臉上浮出了笑容 (《寒》)

場所フレーズに複雑な修飾語がつかない時の X 型 Y 型の割合はどうか。

③場所フレーズに複雑な修飾語があるタイプ

(4) 在他那一下子变得茫然的整个脑子里响彻着三弦的声音 (《雪》)

場所フレーズに複雑な修飾語がつく時の X 型 Y 型の割合はどうか。

④場所フレーズが二つ以上あるタイプ

(5) 我曾流过许多焦急的眼泪, 在泪眼模糊之中, 灯影下往往涌现着 T 女士美丽慈和的脸, ~ (《关》)

(6) 蛋糕的奶油面上红花绿叶中间现出这两个红色的英文字 (《寒》)

場所フレーズが二つ以上ある時の X 型 Y 型の割合はどうか。

⑤目的語が(数詞+量詞+)名詞タイプ

(7) 前面, 在两行柳树中间, 蓦地出现了一座小桥, ~ (《胡》)

(8) 壁橱里有个大活人 (《胡》)

目的語に複雑な修飾語がつかない時の X 型 Y 型の割合はどうか。

⑥目的語に複雑な修飾語があるタイプ

(9) 只不过这儿在每扇矮小的木板门口, 有一两堆被雨雪淋得发黑的柴禾, 或是拉着晾衣裳的绳子, ~ (《张》)

(10) 两侧壁上还塑有别的寺庙中绝少出现的“天龙”八部~ (《胡》)

目的語に複雑な修飾語がつく時の X 型 Y 型の割合はどうか。

⑦目的語が明らかに既知のものであるタイプ

(11) 这次她看见了, 在他身旁就站着那个女人! (《寒》)

(12) 蛋糕的奶油面上红花绿叶中间现出这两个红色的英文字 (《寒》)

存現文の目的語は普通は未知のものだが, 既知のものである時の X 型 Y 型の割合はどうか。

それぞれの数の全体に対する割合 (X 型での数なら X 型全体に対する) は以下のとおりである。

	X型	Y型
① “就”などが場所フレーズに前置されるタイプ	7%	0%
② 場所フレーズが単純タイプ	17%	61%
③ 場所フレーズが複雑タイプ	26%	0%
④ 場所フレーズが二つ以上あるタイプ	20%	5%
⑤ 目的語が単純タイプ	25%	43%
⑥ 目的語が複雑タイプ	29%	1%
⑦ 目的語が既知のものであるタイプ	7%	5%

2. 2, “在”のつく存現文の情報量

上記の結果からは、場所フレーズや目的語に複雑な修飾語がつくときX型が多く、複雑な修飾語がつかないときY型が多い、という傾向が読み取れる。このことは何を意味しているだろうか。

複雑な修飾語とはいわば情報量の多さである。したがって上記の傾向を言いかえるなら、情報量が多いとX型が増え、情報量が少ないとY型が増える、ということである。

ここで存現文とは何か、ということを押さえておきたい。存現文とは「話者がその存在、出現、消失に気付いた瞬間に発話するというスタイルをとった文」のことである。こうした文が存現文のプロトタイプである以上、プロトタイプ存現文の持つ情報量は限られてくるはずである。情報量が多すぎては、気付いた瞬間に発話する、という状態に矛盾する。したがって情報量が少ないと存現文の一般的なタイプであるY型が増える、という上記の結果は当然である。とするなら情報量が多いと増えるX型は、存現文のプロトタイプからははずれているということになる。「話者がその存在、出現、消失に気付いた瞬間に発話するというスタイル」から逸脱している文かもしれない、ということである。

2. 3, “在”のつく存現文の情報の質

先に表示した用例を一つ一つ細かく見ていくと、X型かY型かを決める統語

的要因がきわめて乏しいということに気付く。このことは先にあげた先行研究でも指摘されており、本稿テーマを探る難しさはここにある。わずかに2. 1. の(1)の強調の副詞を用いる例は統語上“在”を導くものと思われる。しかし強調の副詞を用いるX型は7%にすぎない。大部分のX型は統語上からは説明できないのである。

では何によって説明しうるのか。

その一つが先に述べたX型が持つ情報量の多さであり、「その存在等に気付いた瞬間に発話するというスタイルの文」から逸脱しているかもしれない、ということである。

この観点から用例を細かく検討すると「その存在等に気付いた瞬間に発話するというスタイル」を典型として持っている、とは思えない文が非常に多いことに気づく。そのような文をさらに下位分類すると以下の3通りである。

- [1] 話者が初めて気付いたのではなく、すでに知っていることを伝える文。
- [2] 場所を強調した文。つまり話者は初めて気付いたのではなく、すでに知っていることを強調という加工をほどこして述べた文。
- [3] 場所に修辭的な加工がほどこされた文。話者は初めてその存在に気付いたのではなく、気付いた後に修辭的な加工をほどこした文。

このような文はX型の約7割を占め、残りの3割弱が「その存在に気付いた瞬間に発話するというスタイルの文」として読んでもよい、と思われる文である。それぞれの用例を見ていただきたい。

[1] の用例

(12) 前天在小十字碾死一位年轻太太，那才惨。(寒)

悲惨な交通事故の現場に集まった野次馬の一人が他の野次馬たちに「おととも狭い十字路で若い奥さんがひき殺されたんだよ」と教えている場面。

(13) 是的，在山里头有个尼庵呢。(雪)

主人公に「ずいぶん尼さんが通るね」と言われて、うどん屋のおかみが「ええ、この山の奥に尼寺があるんです」と答える場面。

(14) 在右袖襟上有个烧破的窟窿，～(雷)

屋敷のあるじにシャツをもってくるように、と命じられ、「(シャツは何枚もあってその内1枚は)右のカフスに焼け焦げが作った穴があいていて…」と下働きの娘の母親が答える場面。

上記した3例はいずれも自分のよく知っていることを伝えている。

[2] の用例

(15) ～, 单在左腕上戴一只玻璃翠的手镯。(《霜》)

ひとりの女性の装いについて、何のアクセサリもつけていないが「ただ左腕に翡翠のブレスレットをつけていた」と描写している、場所を強調した文。

なぜ場所を強調した文が、「気付いた瞬間に発話するスタイルの文」から逸脱していると言えるのか。モノが目に入った瞬間の意識というのは「アクセサリは何もつけていない、腕にブレスレットをつけている」であって、その瞬間から場所を強調することはありえないからである。「ただ左腕には」と強調するときの意識とは、最初の気づきの後の二次的な意識である。

ただ先にも述べたように、このタイプは統語的に“在”が要請されていると考えられ、[1] [3]とはタイプを異にする。つまり [1] [3]は「気付いた瞬間に発話するスタイルの文」から逸脱しているからX型になる、と考えているわけだが、[2]は「気付いた瞬間に発話するスタイルの文」から逸脱しているX型であると同時に統語的にX型にならざるを得ない文と考えているわけである。

[3] の用例

(5) 我曾流过许多焦急的眼泪, 在泪眼模糊之中, 灯影下往往涌现着 T 女士美丽慈和的脸, ～ (《关》)

(16) 前面, 在两行柳树中间, 蓦地出现了一座小桥, ～ (《张》)

(17) 在湖面终止的远处, 在一抹灰绿色的市区轮廓线上,清晰地、优美地呈现着西山那青黛色的山影 (《胡》)

それぞれを日本語訳すると

(5) 涙でくもった目に, 火影の下に, しばしばTさんの美しくやさしい顔が浮かんだ

存現文に“在”がつくとき

(16) 行く手に、柳並木の真ん中に、突然小さな橋が現われた

(17) 湖面が消えるかなた、灰緑色の市街地との境目のラインに、くっきりと
そして優美に青黒い西山の山影が見える
となる。

これらもまた「気付いた瞬間に発話する文」からは逸脱した文である。なぜなら「Tさんの顔」「小さな橋」「西山の山影」が見えた瞬間はこのような表現法はとらないからである。ある存在に気付いた瞬間、その場所を「湖面が消えるかなた、灰緑色の市街地との境目のラインに」云々と表現するだろうか。下線部は瞬間的な意識でとらえたとするには、あまりにも修辭的である。(5) (17) (18) を表現している時の意識もまた、瞬間的な気付きの後の二次的な意識なのである。

以上のようにX型の用例は「気付いた瞬間に発話するスタイル」を典型としては持たない文が非常に多い。存現文の存現目的語は普通新情報であるが、上記の文の中で、話者の意識としては旧情報になっている。情報の質が、「気付いた瞬間に発話するスタイル」である存現文のプロトタイプの情報と異なるものがX型には非常に多い。

ではY型ではどうなのか。Y型であってもすべてが存現文のプロトタイプとは限らない。用例X型Y型の [1] [2] [3] タイプの文の出現率は以下の通りである。

	X型	Y型
[1]	41%	17%
[2]	7%	0%
[3]	46%	5%

このようにY型では「瞬間的な気付きのスタイル」からの逸脱例がなくはないが少なく、それと比べるとX型はそれが非常に多いのである。ただしX型のこの数字は同じ文で [1] [2] [3] が重複しているものがあり、この三つのタイプの文でX型のほぼ100%を占めるわけではない。

2. 4. 存現モダリティと判断モダリティ

先ほどからいろいろな言いまわしで言っている、気付いた瞬間に発話し文全体が新情報である文を、ここで「存現モダリティ」を持つ文と名づけておく。それに対して、ある事柄についての解説や判断が成り立つことについての話者の判断を述べる文を「判断モダリティ」を持つ文と名づけておく。たとえば

(18) 那里站着一个人 (あそこに女が立っている)

は「存現モダリティ」を持つ文だが

(19) 那个女人站在他身旁 (あの女は彼のそばに立っている)

は「判断モダリティ」を持つ文である。するとたとえば

(11) 在他身旁就站着那个女人 (彼のそばにあの女が立っている)

はどう解釈したらいいだろうか。明らかに瞬間的な気付きの文である。その意味で「存現モダリティ」を持っていると言っている。しかし“那个女人”と特定のをあらかじめ頭において述べている。この意味で「判断モダリティ」をも有していると言えよう。少なくとも「存現モダリティ」のみを持つ文ではない。

ここで2. 3. の [1] [2] [3] におけるX型の用例の検討に戻りたい。これらの用例をこのモダリティという観点に立ってとらえ直すとどうなるだろうか。

「存現モダリティ」を持つ文とは、初めてその存在に気付く、文全体が新情報の文である。しかし [1] [2] [3] の文は先に述べたように話者にとっては新情報の文ではない。[1] [2] [3] であげた文をモダリティの観点から述べるなら、これらは「存現モダリティ」の典型から逸脱し「判断モダリティ」への傾きを有している文である、とすることができよう。

3. X型モダリティを持つ文

上記の小説からの用例の検討を踏まえて、ここでは例文を作成しながら、用例の検討の結果から得たことをさらに検討してみる。

存現文構造を持つ文のうち、「存現モダリティを逸脱し判断モダリティへの傾きを有した文」を「X型モダリティを持つ文」と仮に名づけておく。

存現文に“在”がつくとき

用例の検討の結果から、以下 [1] [2] [3] タイプの「X型モダリティ」を持つ文ならばX型になるものが多いはずである。

[1] 話者が初めて気付いたのではなく、すでに知っていることを伝える文

[2] 場所を強調した文

[3] 場所に修辭的な加工がほどこされた文

同時に、典型的な「存現モダリティ」を持つ文ならばX型にはならないはずである。

3. 1. すでに知っていることを伝える文。

観光ガイドと観光客の会話である。

客「ずいぶん学生さんが多いんですね」

ガイド「ええ、この建物のうらが高校なんですよ」

このガイドの返事は、知っていることを伝えているのだから

(20) 是啊，在这大楼的后边有一所高中呢。

が一番自然なはずである。しかし実際は

(21) 是啊，这大楼的后边有一所高中呢。

も同じように使うことができる。違いは(20)が場所を強調した文である、ということだけで、知っていることを伝える意識が(20)の方が強いわけではない。

すると先ほどの仮説がまちがっているということだろうか。

ここで存現文とはどういう文かということ振り返ってみると、もともと存現文には知っていることを伝える、というタイプが存在する。

(22) 这大楼里有5个办公室

(このビルにはオフィスが五つ入っている)

話者はこの事実をすでに知っているが、瞬間的な気付きのモダリティを聞き手の側に想定して、つまりそれを初めて知る聞き手の側に立って話者はこの文型を使っているのである。2. 3で出した表の数字をご覧いただきたい。Y型にも [1] タイプの文が17%存在する。(22)のような文がそうである。

では「知っていることを伝えようとする文」はX型を使ってもY型を使って

もまったく同じなのだろうか。

たとえば(12)(13)(14)など「知っていることを伝える」文として説明した用例とこれらをY型にした時とを比べるとどういう違いが出てくるのか。

(12) 前天在小十字碾死一位年轻太太,

(12)' 前天小十字碾死一位年轻太太,

(13) 是的, 在山里头有个尼庵呢。

(13)' 是的, 山里头有个尼庵呢。

(14) 在右袖襟上有个烧破的窟窿, ~

(14)' 右袖襟上有个烧破的窟窿, ~

これらの文に対して

「この事実を知っていることだとして、誰かに説明するように述べるならばどちらの文を選ぶか」

「この事実を目の前で繰り広げられる情景を淡々と述べるようにして、述べるならばどちらの文を選ぶか」

という質問をインフォーマントにすると、前者はX型を選び後者はY型を選ぶ、という傾向がはっきりしている²⁾。

つまり同じように使えるとしても、自覚的に説明的な意識を持つとX型が使いやすくなる。X型モダリティを持つ[1]の文はやはりX型の文になる傾向を持つ、とすることができよう。

3. 2. 場所を強調した文。

ふと目に入った光景をそのまま口にする時、たとえば「木に鳥がとまっている」は

(23) 树上有一只小鸟

である。まったく前提なしに突然

(24) 在树上有一只小鸟

となることはない。あるとすれば最初から場所を強調する意識が働いた時である。これもつまり前提であるから、前提なしにふと目に入った光景をそのまま口にする時は(23)、つまりY型になる。もし二人で歩いていて、一方が(23)

存現文に“在”がつくとき

を口にし、もう一方が「どこに？」と聞いた場合、それに対する答えで場所を強調しようと思えば

(24) 在树上有一只小鸟

となる。つまり場所の強調という意識が働いた時はX型になる。

もう1例をあげよう。暗がり二人の人間が歩いている。ひとりが恐怖の叫び声をあげる。「あそこに幽霊がいる！」「どこに？」最初に声をあげた人間は恐怖におびえパニック状態になって、問いかけも耳に入らない。「あそこに幽霊がいる」と常軌を失ったように繰り返すばかり。この状況は

(25) 那里有个鬼！

(26) 在哪儿？

(25) 那里有个鬼！

であって最後の(25)を

(27) 在那里有个鬼！

とはしない。(27)を使えば場所の強調であると同時に、「どこに？」という問いかけに対して「あそこに」と答えることになり、この場面における問いかけも耳に入らないという常軌を逸した様子とは異なってくる。つまりこの時Y型を使うと目に入ったものをそのまま述べるだけとなり、問いかけに対する答えにならない。だからこそ話者が常軌を逸しているというこの場面にはこのY型が使われる。つまり典型的な「存現モダリティ」の文にはX型は使われないのである。

3. 3. 場所に修辭的な加工がほどこされた文

次に修辭的な場面を考えてみる。

「あそこに家がある」これは

(28) 那里有一所房子

である。では

「山のふもとの一面の菜の花畑に家がある」

はどうだろうか。この文は日本語では不自然である。日本語の存現モダリティとしては場所の情報量が多すぎるのであろう。「山のふもとの一面の菜の花畑

に一軒の古ぼけた家がありました」とすると落ち着く。これは場所と存在するものとの情報量がほぼ同じ多さとなり、バランスがとれるからだろう。ただしこのとき、この日本語の文章は存現モダリティのプロトタイプからは離れ、話者にとってはよく知っていることをそれを知らない聞き手に語ってきかせる、という形になる。

中国語では

(29) 在山脚下，一片油菜花盛开的地方有一所房子

となって不自然ではない。この時二つの場所フレーズのどちらかに“在”が入る可能性はきわめて高い³⁾。しかしこのような場所フレーズが二つあるものでY型になるものも少数ではあるが存在するので、統語的な要請から来るものとは思われない。このタイプもまた瞬間的な気付き、話者の判断が入らないという存現モダリティを使って述べようとする、場所フレーズの修辭性——知っていることを加工して伝えようとする意識とぶつかるのである。したがって同じ二つの場所フレーズでも修辭性が感じられない表現の時はY型も使えるようになる。

(30) 山脚下，一片黄色的地方有一所房子

(山のふもとの一面黄色いところに家がある)

この「山のふもとの」と「一面黄色いところ」という表現は単に場所の説明であって、この表現に、先の「山のふもとの一面の菜の花畑に」のような修辭性は感じられない。したがって日本語の方も瞬間的な気付きの表現として不自然ではない。このように修辭性が弱まるとY型も使えるようになる⁴⁾。つまり(29)のように場所を修辭的に表現する文はX型になるのである。

4. まとめ

以上例文作成の結果、「X型モダリティ」を持つ [1] [2] [3] タイプの文はやはり予想通りX型になる傾向を持つ。つまり“在”のつく存現文とつかない存現文の違いというのはモダリティの違いから来ているのである。後者には典型的な存現文のモダリティを持つ文が多く、前者はある事柄について話者の判

断を述べる判断文のモダリティへの傾きを持つ。この違いなのである。⁵⁾

小説における用例の検討、仮説に基づく例文作成と、上記の結論を証明するためにいわば状況証拠固めを行い、ほぼ納得のいく結果をある程度出せたと思うが、できるならば“在”がつくとなぜ「存現モダリティを逸脱し判断モダリティへの傾きを有した文」になるのか、その構造的な要因を明らかにしたい。おそらくは“在”がつくことで統語構造が存現文から一挙に主語を持つ介詞文に似たものとなり、存現文という題目を持たない構造から、題目を持つ文すなわち判断文に近づくことによるものと推測するが、今回はそこまでの探求には至らなかった。次への課題としたい。

注

- 1) 栂山 1991 では“在”がつく存現文がどういう時に使われるか、その内部要因からははっきりとした答えが出ない、と述べている。
- 2) 中国全土から来ている中国人留学生および台湾からの留学生13人にアンケートをとったところ、「説明するように述べる時」(12) (13) (14) (すべてX型)を選んだ人は13人中それぞれ10人, 9人, 11人で、「情景を淡々と述べる時」(12)' (13)' (14)' (すべてY型)を選んだ人はそれぞれ10人, 10人, 11人だった。
- 3) 2)と同様にアンケートをとったところ、どちらか又は両方に“在”を入れた人つまりX型を選んだ人は13人で、どちらにも入れなかった人つまりY型を選んだ人はいなかった。
- 4) 2)と同様にアンケートをとったところ、どちらかに“在”を入れた人つまりX型を選んだ人は13人中8人, どちらにも入れなかった人つまりY型を選んだ人は5人。3) 4)からは修辭性が強まるとX型が増え, 弱まるとY型が増える様子が見えてくる。
- 5) 仁田義雄は「日本語のモダリティと人称」の中で、日本語のモダリティにおいて「現象描写文」と「判断判定文」は「決して切り離されたものではなく、つながっていくところを有している存在であることを認めておくこと

が必要になろう」(p. 40)と述べている。本稿の結論は、中国語においても典型をはずれた地点で同様の現象が起きていることを示している。

参考文献

- 顾 阳 1999. 《共性与个性》北京：语言文化大学出版社。
刘月华 1983. 《实用现代汉语语法》外语教学与语言出版社。
聂文龙 1989. 〈存在和存在句的分类〉，《中国语文》第2期。
齐沪杨 1998. 《现代汉语空间问题研究》。学林出版社。
宋玉柱 1995. 〈论存在句系列〉，《语法研究和探索七》。商务印书馆。
朱德熙 1990. 《语法丛稿》。上海：教育出版社。
吕文华 1997. 〈试论句首短语“在／+处所”〉，《语法研究和探索八》。商务印书馆。
栌山健介 1991. 〈句首的处所词语带“在”的存现句〉，《第三届国际汉语教学讨论会论文选》。
仁田義雄 1999. 『日本語のモダリティと人称』。ひつじ書房。
大谷博美 1996. 「ハとガとφ」, 『日本語類義表現の文法（上）単文編』。くろしお出版。
寺村秀夫 1992. 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』。くろしお出版。

用例出典

- 霜叶红似二月花 1997. 茅盾 人民文学出版社（霜）
关于女人 1984. 冰心 开明出版社（关）
寒夜 1982. 巴金 人民文学出版社（寒）
雷雨 1981. 曹禺 中国话剧选（一）上海文艺出版社（雷）
胡同串子 1997. 刘心武 北京燕山出版社（胡）
张贤亮代表作 1992. 河南人民出版社（张）
雪国（川端康成中译）1997. 商务印书馆（雪）

（よしざわ ひろこ・明海大学非常勤講師）